

武装暴起

No. 253
85 123

マルクス主義学生同盟・中核派

京都大学支部 機関紙

下京区寺町通松原上ル京極町四十七

西田元

革命的決戦の年リハ五年ぶ、年頭ぶりの深い内戦的攻所で開幕した。

革命軍は、年頭より猛然と決起し、一、一日米総領事館へのロケット弾、一一、一、一警察庁科監獄に対する火炎放射とし、超速級のケリラ戦争を叩きつけた。一、一中曾根町阻止戦争から一、一五の三里塚現地戦へ、我が全夢連は、機動隊を圧倒する戦闘的実力(六モ)を、大量逮捕をばぬのけてたかがいぬいた。三里塚反対同盟、勤労子弟、部落解放同盟本支部、全国西農行番などのたかが郡隊は、名所で数々の支持署名、旗開きを、全夢連は第七回中央委員会の成功を、かちとり、三月決戦態勢、反帝大衆決起の布陣が數かげて、街頭に進出するが郡隊は、名所で数々の支持署名、数十万のカンパ、といふたちで、人民のたたかう意趣と合流している。

一、一、一、一、一戦前は、第二の九、十九を戦取し、自民党本部至上への大歓呼をもくして、民衆は急速に勇氣と確信をもって、起り上がりとし、この。今、人民が、正義と怒りを武装してたかに起り上がりとし、日帝の軍事大國化、改憲、アジア侵略をみすみす許してしまつなり、歴史は、われわれの責任を厳しく糾弾するだらう。

日本は、他帝へ先んじて、スター・ウォーズ計画に参入し、最凶悪の帝国主義として、またもや登場しようとしている。侵略戦争への怒りと反省を「総決算」し、いよいよ「人間」をして本性を露そつとせし、人民へのせん滅戦政策に準、て出てきた。国鉄、全通、教育労働者をはじめ、戦闘的労働者を根絶やし、「すくめの」一語詛行革、「教育改革」の強行を許すのか、沖縄の侵略最前線基地化を許すのか、反戦抵抗の裏を叩きつづこうとする、里塚二期戦行のための收用委員会の再用は、国家暴力との全面対立情勢を告げ知らせている。一、九フーレームアップ、一、一、人質処刑」という内戦的手段に何を対置すべきか。人民の戦闘的懸念力、革命軍への身体攻撃に、全人民の総反撃を叩きつけなくてはならぬ。

わが中核派は、かかる敵の先を制し、攻勢由主導的に勝起する。正義の革命的暴力と、不正義の反革命的暴力が全面激突して、このだ。「どちらが勝つべきのか」「どうが打倒されるべきなのか」「このためには自分は何をなすべきなのか」――問題は、こつ設を以て、このだ。主体的な歴史運営、路線選択、階級的党派的選択が、すべての人々に向かって、このだ。

人がたたかって勝利する時代を求めるすべての諸君は、共に三月蜂起に起て、

全闘争総決起闘争 正午の正午

（主催） 無野衆自由会 農業部自由会 教育部自由会

大阪市立大学全體自由会

三里塚二期決戦勝利・西新空港抗議

中核派

3.14 反革命10周年
ファシスト・カクマル徹底せん滅

I

第一回、一九一九年は権力の正義を廃した

「革命軍は、一月一日、戦争と人民救済のための眞理公敵に向つて日本帝国主義にコドック「神戸襲撃」を行ふ。一・九フレームアッヤで「革命軍アシ」解体「をめぐる権力に反して、一・一警備隊火災支那をもつて、武裝斗争の未足的エスカレー三回を叩きつけた。

人民的正義、権力の凶暴化「眞向本」反撃する革命軍。勝利生還した戦斗能力の強羅、コドック「神戸・爆弾・火炎放射とい入衰せる正義」のエスカレーション、報復陣亡・反動キヤン暴行碎らるゝ人民の屈辱が最初一あらゆる昌平戦斗は第二十九、一九二年戦取した。わが戦略的主導の激しく過陣「二九」、ニ三度「一九三、第四十九、一九」を切拓れんと進撃してゐる。

帝国主義の暴力と人民の暴力が眞向本に對し、肉戦的攻防を重ね、「卑賤的企て」の中から内乱、内戦一烽起を準備、高傑であるにない。先制的内戦戦勝の眞骨頂が、ニ三度「一九三、戦とハノ年代中期階級戦との生身の攻防の中から物質化され昌明、人民の正義が武装し勝利する時代。」これが先制、主導、攻勢において開始されたのだ。

(第一) 権力は、いわゆる「報復」、「報復」と認めてます。うつて「民國反革命への報復」など。」、「私仇仇討する権力は認めず、介入・譲付する。まして「中立公正、万能不動の権力」

「報復された」と口走る権力

「一・一戦」をして、「中核派」を「報復された」と権力が発表したことの中に、第一の九、一九の意義が明らかだ。

(第二) こ、「革命軍は、火炎放射といつ激しい火打ちで中核派の怒りの報復を受けたほどの、悪業を犯した」との由白だ。そうじ、日本の組織のリキリのための人民殺しを、生真の三重複農民への十年支配や、わが同族への長崎捕獄、極刑といふ「人質処刑」のやり方で、しかも完全なナツチ上げで、なしこよつねどこの権力を、どうして許せぬか、階級第首や支配の組織がひしひとも頭在化するや、直ちに「武裝暴政をやめむけ、ただただ国民暴力の暴動で諸君殺すよ」なやり方に、いつまでも人民が反撃と報復の權力を留保しててよいはずがない。勝利する武裝斗争こそ、権力の不正義、有限性、腐敗を暴き、人民の不屈、不滅を昭すにさるのだ。

「第一」に、権力は、いわゆる「報復」、「報復」と認めてます。うつて「民國反革命への報復」など。」、「私仇仇討する権力は認めず、介入・譲付する。まして「中立公正、万能不動の権力」

に対する報復を一ミリでも認めてしまえば、支配と名目は複雑が「報復」し始めたのに。権力は、戦斗の正義性「庄重」にて報復すべし」と口走ることで、日本階級斗争、革命斗争における「ベトナム」的報復の現実性、内乱、内戦一烽起、革命の現実性、権力と対峙する報復した人民の党的存続を認めたのだ。そして(第二)に、被「報復」者ニ打倒やれるべき者としての自己を虚偽に再構築し、いよいよ既得・既悪化し、由核派とニ軍報斗争を第一級の治安問題、せん戒が變として、標榜すると言ったのだ。

日本とその連邦の軍事化と標準化の反對を

われわれは、分明にありますから、先制、主導、攻撃の戦略、戰術をもつて、侵略への飛躍・転化を目指そうとしている。

そもそも、アコレナリア革命が、本質的に改革的、目的意識的事業だからだ。「民主主義は總ての内戦」（マルクス）であり、一つの統治形態にすぎない。この「イデオロギーの葉」、ベーリーをはじめ、眞實的内戦の本質を明示するのは、支配者の方でなく、たゞかう人民と党的先制、主導、攻撃によるべきなのだ。ロシア革命以降の現代世界を規定するへ革命へ現実性を支配者側は完全に自負している。

肥大化した軍事権力や民間反革命の暴力を使嗾し、日々平防反革命攻撃を仕掛けてくるのだ。革命の側は、勝利する舞起の戦闘的の眞面目な活動をとおして、はじめて革命の現実性をいかがむとしている。

現に、侵略戦争への怒りと反対のすべてを「終身資本」する大戦争が開始され、内乱的総反撃の砲一三重爆る、二〇年史上最大の大戦局面を迎えた。先を制して勝利することぬきに一切は空語だ。民衆の切実な願いと希望のすべての存否も、二二にかかれておこる。

人民の苦悩の根源、怒りの打倒標榜する日本帝国主義の体制的危機と凶暴化の激しさと方向を科学的に見さえ、彼の力闘体を鼓舞し見えた上で、やはり先制攻撃、攻勢有理¹とはきり確認できるのだ。帝国主義の有限性と人民への見くびりの致命性、人民の正義と概念の圧倒的優位性——これを過半証明することはできない。まして、日本の勞働者階級の戦闘的骨は健在であるばかりか、武装したかい勝利する党と軍を手中の手²として、不屈の三里塚を誓としているのだ。

宇宙連邦への参入

戦後の日本を支えた存立条件は、① 戦後体制のアメリカ統一性の下での日米安保体制 ② その下での高成長 ③ 戦後民主主義といふ統治形態に既成形態を承認させてきたこと

であり、そのすべてが崩壊している。日本は、戦後高成長を実現すれば守るために、戦後体制のアメリカ統一性を再構築し、破壊してきた。今や、世界不規の中でも、他都市へのなぐり二計的輸出と赤字回債の思無限的航行の計が日本を走えている。失業と不況を輸出し、他市の保護主義化、プロリバ化を促進し、国内では財政赤字が政策展開の手足を縛つて居るのだ。

自らの経済大國にならして、権益を死守するため、独自の

軍事大國化・世界戦略・黒帯外交政策の展開力加、死著的におのづこしているのに、日本経済産業—貿易・通商・金融をめぐる非和解的対立の中に、經濟で失ったものを軍事化とり返す「米帝の対日封鎖戦への対抗の中」と、日帝の軍事化への根柢からの衝動を見てくるべきなのだ。こうした立場から日帝は、軍事化への飛躍を立てて、日本安保を積極的に活用する戦略に転換した。一日米首脳会談における、スクーネード参入と、非和解的終着対立は、いくつものとしてある。日帝は、軍事化を「ソ連脅威」論、「大英帝国」論で二重三重に擁護する。反ソ運動や民族民主革命でカロルニア革命、日帝打倒闘争を煽起しようというのだ。

自國帝国主義との対決からの逃亡を立脚点とする反革命一派は、日帝は、日帝の軍事化を「ソ連脅威」論、「大英帝国」論で二重三重に擁護する。反ソ運動や民族民主革命でカロルニア革命、日帝打倒闘争を煽起しようというのだ。

自を「終身資本」するのか

中國は、へ戦後へを規定する、中国、アジア侵略戦争への怒りと反対を一切「終身資本」し、反戦平和の願いやにかい、并闘運動が築いてきた多くの既得権、賭博の力闘筋も、連続たるにかいで獲得してまた部署解体運動の地平も、学園にかけられる力闘筋も、およそ一切合財を「終身資本」しようとしている。とりわけ、国鉄労働運動解体のために、賭博慣行を暴力的に破壊した拳司、三月、四月のハイ投票時期に、大量のナラ首切りの風が吹きあつとしている。国鉄求戦は完全に開始された。戦後反戦意識、権利意識、戦闘的気運の根絶のためには、その中核としての革命求戦義をもって「城内平和」を暴力的に確立しようとしている。軍事化等と反戦闘争根絶一体化で、リ、三重爆弾爆破、革命者殺戮こそ、「戦後終身資本」攻撃に立ち去る最強の砲の根絶一掃の立場だ。

十一年バリの土地収用者問題

日本は、「八五年に安老公團の存せのかがつに年」（副總裁）

松本³とし、一五五億円の成田空襲空襲決定した。空襲とは、遂に義務化するものであり、一類工事は國民的体制的範囲の内閣に改憲を乞うて至こしたのだ。

十一月四日、千葉県公用委員会の再開が報じられた。十二年に大木よしやんにながれ殺し的暴行を加え、農民、労働者、学生を空襲中に十数メートルの高さからひき倒して犠牲の重傷を負わせ、テロ、テロチで現地を襲いつぶして強行された強制代執行一派を再び二度と強行するための手綱を再施したのだ。

すでに昨秋より、反対同盟に対する凶悪な攻撃がかけられて

する。九・二七には、七〇オになる市東東市千人の露面を聞き、五人の農民と數十人の支援を獲得し、成田用水工事を強行開始した。十一・一一には「未だ山里塚に住むたがつてじるから有罪」としてボタラメの譴責で、青年行動隊に懲役十年を科されたのが、妻田環哉(よし)アヤ達(アヤダ)特別説文

三、三日空前の現地総決起へ！

学生運動の累たすべき復讐は重大だ。権力、反革命を叩き伏せ、キャンパスを内乱、内戦一揆起の基、出撃決意とせよ。

階級の子、人民の子として、今、起きて未来を拓け。
革命軍を支え、革命軍と共に
一一一、一一戦闘を越える、民衆の怒りと正義を体現した武装闘争を、断固として実現しよう。
一二一月に京大支部を通して革命軍に掏出された軍資金は百円を越えている。より多くの諸君が、「わが軍、わが戦闘」として勝利するため、奮闘する所と語れる。一・九フレームアダ・粉碎のたかいも、革命軍と共に三里塚決戦をたたかうねが学生運動の展開力でたたかうといふ。

カクマルせん滅、一掃！

来たる三月一日日本は、ファシスト、カクマル共軍共同本多書記長を虐殺してから十年目にある。現代革命は、民眞反革命の絶望的凶悪化を粉碎、せん滅してこそ、勝利の条件をつかむこと。これが、三〇年代国際階級戦争の、七一年代十二・四反革命、七五年三・一四反革命の、血の教訓だ。権力と連合し、〇年決戦も、艦官隊による艦船をのりこえてたたかわれた。反基地戦争や、労働争議も、反公害運動も、差別糾弾戦争も、全て機動隊の力だと実力対決してたたかわれてこる。そして、新たな時代は、必ず、全導運の実力で戦ってきただけだ。

今こそ、三里塚環保で、街頭で、キャンパスで、階級矛盾の爆発する全戦線において、実力で機動隊を粉碎すべしといふ。すとこ、用木決戦、カールジョンソン阻止戦争、中曾根詔米阻止戦争において、それは即ち、している。全人民が強烈に學生の決起を待ち望んでこるのである。三モは、人民の政治参加、政治決起の最も初步的な表現であり、戦闘的手段の権利すら奪おうとする機動隊は、せん滅・粉碎されて当然だ。

反対同盟を守り、環境攻防戦に陸續と決起するためにも、今や戦闘的実力でモをぬきにあり得ない。権力との死闘戦に突入した農民を支え、二期攻撃を一つ一つ粉碎していくのだ。嵐のあつた民衆蜂起の時代を、学生運動の力で切り拓こう。

の装甲車が徘徊し、朝な夕なテロ、リンチが常態化している。権力と眞田から封跡する三里塚武装闘争の爆発が、今こそ求められていける。権力の凶暴化、凶悪化を迎え撃ち、巨大な反帝大衆決起を実現するべきところである。